佳作

斜め上には空がある

愛知県 愛知県立岡崎北高等学校一年　平松 慶志

僕は、高校入試落ちたての高校一年生だ。現在、第二志望校であった学校に通っている。中学生の僕の目標、第一志望校合格。その目標だけを追いかけて、生きていた。だが、現実は残酷だった。合格という光はずっと先のほうで消えてしまった。そんな気がした。光は消え、残ったのは、真っ暗の中に取り残された自分自身のみ。さらに、怒りや悲しみ、そしてなによりも自分を応援してくれていた周りの人たち全員を裏切ったような罪悪感。そのようなマイナスな感情が、暗闇をさらに黒く染めていった。ついには、生きがいを失なった気がした。そんな中で、登下校を繰り返してきた、ここ三ヵ月。そこには通うはずだった通学路はなかった。

ある日のことだった。いつものように学校が終わり、教科書の入った重たいリュックサックを背負って帰ろうとしていた。すると、突然大雨が降ってきた。そして、その大雨のあまりに、「しばらく外に出るな」というアナウンスが入った。下を向いていた顔を窓がある方向へと向ける。外を見れば、あたり一面黒い雲で覆われていた。まだ夕方なのに、すっかり夜になってしまったような暗さだ。さらに、地面に強く打ちつける雨粒が見えた。地面に恨みでもあるのかと思うほどに。なんだかいろんなことを考えていたら気分が沈んできた。偏頭痛もする。荒れた天候がなんだか自分の今までの人生を示し、これからの人生を示しているみたいだと思えてきた。そんなことを考えているうちにすっかり天気は回復していた。通り雨だったようだ。その後、外に出て、駐輪場へ向かう。自転車にまたがる。だがこのあとがいつもとは違った。なにも考えずに自転車を走らせて帰るのが日課だったのだが、その日は違った。下校途中にふと気づいたのだ。空の上、後ろには依然として雲が残っている。だが、斜め前の空には青空が一面に広がっている。まぶしいくらいだ。そこで思った。希望の光というものはまだ残っているのだと。なんだか妙に自信が湧いてきた。それと同時に、ホッとして、涙が出そうだった。頑張って生きようと思えた。久しぶりに気持ちが晴れた気がした。それに加えて気づいたことがある。いつもは、建物や木々に囲まれ孤立感があったのだが、自分の考えは違っていた。空が教えてくれた。世界が広いことを教えてくれた。なんだかどこにでも行けるような気がした。そんなこんなで下校が終了した。

その日から少し経って、自分の未来について考えるようになった。そこで一つ考えた。アニメなどで、未来を予知する能力をもつキャラクターが出てくることがある。何で予知しているのだろう、と不意に思った。未来とは、自分の意志で動くはずだ。そうすると予知能力があるキャラクターたちは、相手の意志も読めるのかもしれない。少し脱線してしまったが、ここで思ったことの結論としては、運命という決まった未来なんて存在せず、自分の意志、考えによって自分の一分後、あるいは一ヵ月後、あるいは一年後の未来が決まっていくのだということだ。ここで希望は自分で作れることが証明された。

僕はあの雨の日を絶対に忘れない。いや、忘れてはならない。この先、光があること。自分でその光を作れること。そこに向かって歩き出せるということ。暗闇でさまよっていた自分は、いつのまにかその暗闇をくぐり抜けていたようだ。また、この世界は広いということも空から学んだ。だからこそ、より自由に自分の未来に向けて歩んでいきたい。

さあ、三年後には次の試合が待っている。もう迷わない、下を向かない上を見るんだ。また辛くなったら空を見上げよう。そしたらあの日のことを思い出せるはずだ。そして、次の試合に向けて今日も努力をしていく。

次は絶対に負けない。絶対に勝つ。そう自分の心に誓った。